

小説などには適當するが、滑稽物には相當しません。滑稽物、其れからまた、一般の讀者も、從來の慣習で、滑稽と云へば昔時の黄表紙物と同一に思ひ、落語家の前坐と同等の輩ばかりがやる事の様に考へますから、書く方でも甚だ損です。デスからどうも他の小説よりは滑稽物の發達が遅い、ダガ人の嗜好は、新奇を、新奇を、と求めますから、戀愛小説にも倦み、悲哀小説にも飽きて、此頃はまた滑稽物を欲しがる様になつて來た、恰ど浦焼や鳥鍋に喰ひ饜きると、香の物の茶漬が戀しくなる様なものでス、ソコで書く方でも覺へず知らず世間の人氣に釣り込れて、何時か其方へ向ふ様になり、其れだから此後は、追々に面白ものも出ませうが急に出る出ると、促がすのは無理ですナア、政治小説や軍事小説デスカ、此れはまた前に言ひます通り、小説家が元來陰氣な人が多く、多く人と交際しない、ヨシヤ交際しても、同臭味の人ばかりで、政治

家や軍人とは交際しませんから、どうも其の境遇を想像することが出来ません。此頃は新聞記者のお役人様が大分出來ました、此の新聞記者には、我々の仲間も交際がある、其れだから追々其の新しいお役人方が役所の實際にも通じ、また小説家も役所まで此等の人を尋て行つて、親しく話でもする様になると、餘程内部の事情が分つて來る、其れですから、私は人材登用が大賛成デス、此頃はまた一旦這入つた人達が、續々廢めることになつて、實は失望しましたが、兎に角軍人、政治家、文學者、小説家、と斯う云ふ人が時々一所になつて話しをする様にしたいデスナア、貴方の所の連さんなどは、此事には大分お骨折デスカ、追々實行されるでせう、近來は小説家の島も大分廣がりて、随分色々な方面を開拓する人々が出て來ましたが、此れから先きは最ツと大きく政治でも戦争でも、ズンズン小説の中へ編み込む様でなくては、どうもまだ小説家の幅が利きません！(治雷閑人)

文苑

各種の詩歌美文を收む、風雲に寄懷し、時事に高目す、忽にして流麗閑雅、忽にして幽咽悲壯、讀者此に至りて衆香の圃に遊び、積玉の圃に入るが如し。

祭森田思軒文

依田 學海卿  
明治三十年十月十四日、吾友森田思軒君、以病易簣於東京根岸私宅。越三日、葬于中根岸世尊寺。嗚呼、君

今年三十有七矣。抱有爲之志、溘焉以歿、何天之不祈於吾文學、棄斯絕世之才人耶。凡天下少解文學者、誰不痛哭慨歎。况於吾輩朋友、朝夕來往、接其鬚眉、聽

其談論、以啓發昏蒙者耶、君少學阪田警軒先生、講經史、習文詞。尋來東京、受知矢野龍溪先生、精通洋學。嘗遊海外、周覽萬國之形勢、洞觀殊方之風俗、以磨學識、修鍊其辭章、世稱少年才子、必屈指思軒氏、何其

川書越後中頸城郡赤倉香嶽樓、

妙香殘雪

蟠踞頸城郡。巖然萬翠堆。神仙攸窟宅。突兀妙香臺。積雪殘猶在。春風吹不回。窮陰有陽復。他日發雲雷。土屋風洲曰、世事亦然乎

米山浮雲

感慨雙眸聚。當年不識公。米山初試武。春嶽遂從戎。雲雨遭逢際。山河指顧中。翠光照千里。想見伏群雄。三島中洲曰、二十律多流水對、自此始非吾兄自在之筆則不能。土屋風洲曰、十字情景渾融

神名驟雨

氣候日千變。片時陰霧紛。忽看半峯霧。蔓作一天雲。雷怒震深壑。電奔驅萬軍。雨聲猶未歇。倏爾洩斜曛。三島中洲曰、驟雨倏忽之狀、寫得如目睹

黑姬斜暉

驟雨時還歇。斜陽照遠岑。青葱開碧玉。燦爛撒黃金。仙女瓊瑤服。美人璫瑁簪。湏叟奇幻盡。曠色入深林。遊園鶯語

遊園鶯語

苔石千餘字。穹窿開創碑。靈泉長不竭。恩澤本無私。篤實仰昌德。簡明無溢辭。鶯聲頻宛轉。尙似語當時。三島中洲曰、創開之澤、鄙文所不記及、得此詩始完備

古池蟲聲

鑿然一池古。亭午有蟲音。山碧秋容澹。水清草色深。

赤倉二十勝詩 依田 學海百川

友人三島中洲以明治二十七年遊於此、選二十勝、各係小記、文辭精美、考證的確、今茲余亦遊、欲

倣攣、無可復置辭者、乃借題得二十律、非曰補遺、聊以述懷耳、三十年八月廿四日、學海居士依田百